

超能力を持った六人家族の繁栄とその因縁譚

——『ディヴィヤ・アヴァダーナ』第9-10章和訳——

平岡 聡

はじめに

本稿は『ディヴィヤ・アヴァダーナ』（以下、Divy.）第9-10章の和訳である。Divy.では、ある主人公の現在物語とその因縁譚とを同一章内で説くのが普通であるが、ここでは主人公の家族の現在物語が第9章として、またその因縁譚が第10章として、独立して収められている¹⁾。しかしこの2章は密接に関連しているから、ここではこの2章を一纏まりの説話として扱うことにしたい。前半（第9章）では長者夫婦と息子夫婦、それに男奴隷と女奴隷の六人が各人各様の特殊な能力を持ち合わせている様子が説かれ、後半（第10章）ではそのような能力を持つに至った因縁が業報の原理をベースにして説明される。Divy.では在家信者の布施をテーマとする物語が散見されるが、その際には「何を布施したか」よりは「どのような状況にいかなる気持ちで布施したか」が重要になる²⁾。この説話では、飢饉に見舞われて食は底をつき、最後に残された僅かな食物さえも、乞食にやってきた独覚に布施する長者およびその家族の行為が主題になっていると言えよう。翻訳に当たって底本にするのはカウエル本であり、訳の中に〔 〕でそのページ数を示す。なお、本説話の文献に関するデータは次のとおりである。

Skt.: MSV i 241.1-255.10(GBM 229 a[770]1-231b[775]10)³⁾。

Cf. Vin. i 240.5-245.7; Dh-p-a iii 363.13-376.4⁴⁾。

Tib.: 1030 Ñe 26a3-32b7; 1 Ga 28a 5-35a4.

漢文: None. Cf.『五分律』卷22(T.1421, xxii 150b25-151b18);『四分律』卷42(T.1428, xxii 872b18-873a 24);『十誦律』卷26(T.1435, xxiii 191a26-b22)。

翻訳: Burnouf(1844:190-194)[Divy. 131-135に相当]。

研究: Ch'en(1953)。

「メーダカ・アヴァダーナ」和訳

前半：メーダカ長者の繁栄

[123] シュラーヴァスティーに縁あり。ちょうどその時、パドランカラ⁵⁾の都城には幸運な人が六人住んでいた⁶⁾。長者メーダカ⁷⁾、メーダカの妻、メーダカの息子、メーダカ〔の息子〕の嫁、メーダカの奴隷、〔それに〕メーダカの女奴隷である。

どのように長者メーダカが幸運な人として有名だったかということ、もし彼が空の蔵や倉庫を見れば、見た途端に〔その中が〕満たされるからである。このように長者メーダカは幸運な人として有名であった。メーダカの妻はどのようにかということ、彼女が一人のために食器を用意すると、

〔その人〕は百千人〔分の食〕を食べることになるからである。[124] メーダカカの妻はこのようであった。

メーダカカの息子はどのようにかという、彼は腰に五百の財布⁸⁾を結びつけているが、彼が百あるいは千〔金〕を使った時、〔財布の中〕は一杯になり、尽きることはないからである。長者メーダカカの息子はこのようであった。メーダカ〔の息子〕の嫁はどのようにかという、彼女が一人のために香を準備すると、百千もの人々が悉く〔それを〕享受するからである。長者メーダカ〔の息子〕の嫁はこのようであった。

メーダカカの男奴隷はどのようにかという、彼が一つの鋤の刃を引けば、七つの〔鋤の〕刃が引かれたことになるからである。長者メーダカカの男奴隷はこのようであった。どのようにメーダカカの女奴隷は幸運な人〔として有名⁹⁾〕だったかという、彼女が一つの物を保管すればそれは七倍になり、一つの物を管理すればそれは七倍に増えたからである¹⁰⁾。メーダカカの女奴隷はこのようであった。

— 大悲の持ち主であり、世間の利益に邁進し、唯一の防御を有し、止観に住し、三〔業〕の調御に巧みで、四暴流を渡り、四神足という足の裏の上にとしっかりと立ち、四摂事に久しく親しみ、五支を離れ、五趣を超越し、六支を具え、六波羅蜜を完成し、七菩提分という花に富み、八支聖道を示し、九次第等至に巧みで、十力で力強く、その名声は十方を満たし、千の自在者のうちで最も優れている諸仏・諸世尊には、夜に三回・昼に三回、昼夜に六回、仏眼を以て世間を観察すると、智見が生じることになっている。＜誰が衰え、誰が栄えているか。誰が不幸に陥り、誰が困難に陥り、誰が危機に陥っているか。誰が不幸・困難・危機に陥っているか。誰が悪趣に向かい、誰が悪趣に傾き、誰が悪趣に落ちようとしているのか。私は誰を悪趣への道から引き上げ、

天界という果報や解脱に安住せしめようか。愛欲の泥沼に沈んでいる誰に手を差し伸べようか。聖なる財産をなくした誰を、聖なる財産を自由に支配できる地位に安住せしめようか。未だ植えられざる善根を誰に植えようか。[125]すでに植えられた誰の〔善根〕を成熟させようか。すでに成熟した誰の〔善根〕を〔果あるものとして〕解き放とうか。無智という真つ暗な幕に覆われた眼を持つ誰の眼を、智という目薬の付いた棒で浄めようか＞〔と〕。

魚の住処である海は岸を越えていくことがあっても、仏が教化すべき愛し子達の時機を逸することはない。一切智の相続に安住する慈悲ある牛は、倦むことなく、教化すべき愛し子達、有の險道で立ち往生している愛し子達、死に瀕している愛し子達を捜し求める。子牛を慈しむ牝牛のように¹¹⁾。—

世尊は考えた。

＜かの長者メーダカは従者達と共にパドランカラの都城に住んでいる。膿み切った腫れ物が今にもメスで切り落とさようとすが如くに、彼を教化すべき時が〔熟した〕ように見える。いざ私はパドランカラ地方に遊行に出掛けよう＞

そこで世尊は同志アーナンダに告げられた¹²⁾。

「さあ、アーナンダよ、おまえは比丘達に〔次のように〕告げなさい。『比丘達よ、如来はパドランカラ地方に遊行に出掛けられる。お前達の中で、如来と共にパドランカラ地方に遊行に出掛るつもりである者は、衣を手をせよ』とな」

「かしこまりました、大徳よ」と、同志アーナンダは世尊に同意した後、比丘達に、「同志の皆さん、如来はパドランカラ地方に遊行に出掛けられます。皆さんの中で、如来と共にパドランカラ地方に遊行に出掛るつもりである者は、衣を手をにされますよ

うに」と告げた。かの比丘達は同志アーナングに「かしこまりました、同志〔アーナング〕よ」と同意すると、背後からついていったのである¹³⁾。

その時、〔よく自己を〕調御し、寂靜で、解脱し、安穩であり、〔よく自己を〕調伏し、阿羅漢であり、離貪し、端正な世尊が、〔よく自己を〕調御し、寂靜で、解脱し、安穩であり、〔よく自己を〕調伏し、阿羅漢であり、離貪し、端正な従者を従えている〔様〕は、雄牛が牛の集団に、獅子が牙を有する動物の集団に、白鳥の王が白鳥の集団に、[126] ガルダが鳥の集団に、バラモンが弟子の集団に、名医が病人の集団に、勇者が武士の集団に、導師が旅人の集団に、隊商主が商人の集団に、ギルドの長が市民の集団に、城主が大臣の集団に、転輪王が千人の息子に、月が星の集団に、太陽が千の光線に、ドゥリタラーシュトラがガンダルヴァの集団に、ヴィルーダカがクンバータの集団に、ヴィルパークシャが龍の集団に、クベーラが夜叉の集団に、ヴェーマチトリンがアスラの集団に、シャクラが三十〔三〕天に、ブラフマンが梵衆〔天〕に囲遶されているが如くであった。〔また世尊〕は、凧いだ大海の如く、〔満々と〕水を湛えた大海の如く、興奮せぬ象王の如くであった。よく調御された諸根によって振る舞いと行動は落ち着いており、三十二大人相によって〔見事に飾られ〕、八十種好によって身体は光り輝き、同じく十力、四無畏、三念住、そして大悲によって多くの徳の集まりを具えた仏・世尊は、地方を遊行しながらバドランカラの都城へ向けて出発した¹⁴⁾。

〔かつて〕世尊がシュラーヴァステイーで大神変を示され、神々や人々が度胆を抜かれて感嘆し、正しき人々の心が満足させられた時¹⁵⁾、面目を失った¹⁶⁾外道達は辺境地に引き籠もってしまった。こうして、ある者達はバドランカラの都城へ逃げて住み着いていたが、彼らは沙門ガウタマがやって

来ると聞いた。そして聞き終わると、怖じ気づいた彼らはお互いに話し合った¹⁷⁾。

「以前、我々は沙門ガウタマによって、まず中国地方から追い出されたが、もし彼がここにやって来れば、必ずや〔我々を〕ここからも追い出すであろう。よって、手だてを講じなければならぬ」と。

彼らは、法廷¹⁸⁾に出向くと、「判事さん、判事さん¹⁹⁾」と言った。

彼らは言った。

「²⁰⁾一体何事ですか」

「²¹⁾ご機嫌よう。さらばじゃ」

「どうしてですか」

「我々はあなた方の幸せな姿を見てきたが、不幸な姿は見たくないのだ」

「聖者達よ、我々に不幸が起こるとでも」

「皆さん方、沙門ガウタマは剃刀のような電光を落とし、多くの者達から子供を奪い、主人を奪いながら〔ここに〕やって来るのだ」

「聖者達よ、もしもそうなら、居てもらわねばならぬちょうどその時に [127] あなた方は私達を見捨てることになります。居て下さい。行かないで下さいよ」

彼らは言った。

「居るとも。〔その代わり〕あなた方は我々の言うことを聞いてくれないか」

「聖者達よ、仰って下さい。聞きましよう」

彼らは言った。

「バドランカラ周辺の住民すべてを〔この都城から〕追い出し、バドランカラの都城を空にせよ²²⁾。草を引き抜き、土地を荒廃させよ。花や実のついた木を切り倒し、毒で水を汚染するのだ」

彼らは言った。

「聖者達よ、ここに留まって下さい。

〔我々〕はすべて実行しましょう」と。

彼らは留まった²³⁾。その後、〔裁判所の者〕達はバドランカラ周辺の住民すべてを〔この都城から〕追い出して、バドランカラの都城を空にし、草を引き抜き、大地を

荒廃すると、花や実のついた木を切り倒し、毒で水を汚した。その時、神々の主シャクラは考えた。

く世尊は、三阿僧祇劫の間、何百千という難行によって六波羅蜜を成満し、無上智を獲得されたが、私が〔その〕世尊に対する侮辱を黙って見過ごすとすれば、それは私にとって相応しいことではない。一切世間の中で最も優れ、一切の論争において勝利した世尊が²⁴⁾、誰もいない地方に遊行に行こうとされている。私は、声聞の僧伽を引き連れた世尊が快適に過ごされるように一生懸命に努めよう」と。

彼は風雲の天子達²⁵⁾に「さあ、バドランカラの都城の付近の²⁶⁾毒水を蒸発させよ」と命令し、雨雲の天子達²⁷⁾には「八功德水で満たせ²⁸⁾」と命令した。四大王天達も次のように言われた。

「お前達は、バドランカラ地方の住民を〔再びそこに〕住まわせるようにしろ」と。かくして風雲の天子達は毒で汚染された水を蒸発させ、雨雲の天子達は同じ井戸・泉・池・沼・貯水池を八功德水で満たし²⁹⁾、四大王天達はバドランカラの都城周辺住民すべてを〔再びそこに〕住まわせたので、国土は繁栄し、賑やかになった。

都城の住民達と一緒にいた外道達は「国土がどうなっているか見に行つてこい」と遣いを送った。彼らが行つてみると、国土が以前にも増して繁栄し、賑やかになっているのを見た。〔彼ら〕はそこから戻ると、「皆さん、我々は、いまだかつてあんなに繁栄し、賑やかな国土を見たことがありません」と告げた。外道達は言った。

[128]「君達、心を持たない者を〔も〕改心させてしまう者（ブツダ）がお前達を改心させないことが、どうしてあろうか。何があつても〔我々〕は暇乞いをする。あなた方を見るのもこれが最後だ。では行くでしょう」と。

彼らは言った。

「聖者達よ、待つて下さい。沙門ガウタマがあなた方に何をしようと言つて下さい。彼も出家者なら、あなた方も乞食の出家者ですよ。どうして彼があなた方に施食を乞うことがありましようか³⁰⁾」と。

外道達は言った。

「条件付で〔我々〕は留まろう。誰一人として沙門ガウタマに会いに行かないこと、行つた者は六十カールシャーパナの罰金という約束をしてくれれば、だが」と。

彼らは約束し、誓約した。

その後、〔世尊〕は地方を遊行しながら³¹⁾バドランカラの都城に到着されると、バドランカラの都城³²⁾の南の住処で時を過ごしておられた。ちょうどその時、バラモンの娘がカピラヴァストゥから都城バドランカラに嫁いでいたが、彼女は城壁の上に立ち、暗闇の中に世尊を見た。彼女は考えた。

くかの世尊はシャーキャ族の子息で³³⁾、シャーキャ族の家系から王位を捨てて出家されたのに、そのお方が今、暗闇の中にいらつしやる³⁴⁾。もしもここに梯段があつたなら、私は灯明を持って降りて行けるのに」と。

そこで世尊は彼女の心を〔自らの〕心で知ると、梯段を化作された。すると〔彼女〕はドキドキし、ワクワクし、ウキウキしながら、灯明を持って梯段を降り、世尊のもとに近づいた。近づくと、世尊の前に灯明を置き、両足を頭に頂いて礼拝すると、法を聞くために坐つた。そこで世尊は彼女の気質・性質・性格・本性を知ると、四聖諦を洞察させる³⁵⁾——前に同じ。乃至——

〔三〕帰依し、浄信を抱いた〔優婆夷として護念したまへ〕³⁶⁾と。

その時、世尊はその娘に次のように言われた。

「さあ³⁷⁾、娘よ、お前は長者メーダカのもとに近づけ。近づくと、私に成り代わつて挨拶してほしい。そして次のように口上を伝えるのだよ。『長者よ、私はお前のた

めにここへやって来たのに、お前は門を閉めたままにいる。お前の振る舞い方は、客（私）への振る舞いとして適切であろうか』と。もしも彼が『皆で誓約したことで、すので』と答えたなら、〔こう〕言いなさい。『お前の息子は五百の財布を腰に結び付けている。〔129〕たとえ彼が百あるいは千〔金〕を使っても、〔使った分〕はそっくりそのまま満たされて尽きることがない。〔お前〕は六十カールシャーパナを払って〔会いに〕来ることができないかね』と」その娘は「かしこまりました、大徳よ」と世尊に同意すると、出発した。〔彼女〕は決して誰にも知られないように³⁸⁾、長者メーンドガカのもとへ行った。行って〔彼女〕が「長者よ、世尊があなたに御挨拶申し上げます」と言うと、彼は「³⁹⁾仏・世尊に敬礼申し上げます」と答えた。

「長者よ、世尊は次のように申しておられました。『長者よ、私はお前のためにここへやって来たのに、お前は門を閉めたままにいる。お前の振る舞い方は、客（私）への振る舞いとして適切であろうか』と」彼は言った。

「娘さん、『誰も沙門ガウタマに会いに行かないこと、行った者は六十カールシャーパナの罰金が皆によって課せられる』という誓約を皆でしたのです」

「長者よ、世尊は申されました。『お前の息子は五百の財布を腰に結び付けている。

〔129〕たとえ彼が百あるいは千〔金〕を使っても、〔使った分〕はそっくりそのまま満たされて尽きることがない。〔お前〕は六十カールシャーパナを払って〔会いに〕来ることができないかね』と」

彼は、<誰もこのことは知らない。きっとかの世尊は何でもお見通しなのだ。〔私〕は出掛けよう>と考えた。彼は六十カールシャーパナを門のところに置くと、バラモンの娘に教えられた梯段を降り、世尊のもとに近づいた。近づくと、〔彼〕は世尊の両足を頭に頂いて礼拝し、法を聞くために

世尊の前に坐った。そこで世尊は、長者メーンドガカの気質・性質・性格・本性を知ると、四聖諦を洞察させる法を説かれ、それを聞いた長者メーンドガカは — 乃至 —

預流果を作証した⁴⁰⁾。真理を知見した彼は、「世尊よ、パドランカラの都城⁴¹⁾に住んでいる人達もまた、このような諸法を得た者となるでしょうか」と言うと、世尊は言われた。

「長者よ、お前次第で十中八九総ての人々が〔諸法を〕得た者となるだろう」と。そこで長者メーンドガカは世尊の両足を頭に頂いて礼拝し、世尊のもとから退いた。

〔彼〕は我が家に戻り、都城中央にカールシャーパナの山を築くと、詩頌を唱えた。

「貪の罪を克服し、冷静で⁴²⁾比類なく、黄金のように目映い⁴³⁾勝者を見たい者は〔130〕確固たる不動の心を以て直ちに掛けよ。その金は私が払おう」と。

人々が「長者よ、沙門ガウタマに会うにしくはない」と言うと、彼は「そのとおり」と答えた。彼らは言った。

「もしもそうなら、皆によって取り決められた誓約は、その同じ皆によって破棄しよう。これに関して何の矛盾があるか」彼らは誓約を破棄し、外に出始めた。すると〔人々〕はお互いに押すな押すなの大騒ぎで、外に出ることができなかったのも、夜叉ヴァジュラパーニンは教化されるべき人々を憐れみ、金剛杵を投げつけると、城壁が崩れ落ち、何百千という人達が、ある者達は好奇心に駆られて、ある者達は前世でなした善根に促されて外に出てきた。彼らは進み、世尊の両足に礼拝して〔世尊の〕前に坐ると、世尊の周辺には衆会が形成された⁴⁴⁾。そこで世尊はその衆会を威厳で圧倒し⁴⁵⁾、比丘僧伽の前に設えられた座に坐ると、多くの有情の〔心の〕相續に善根を植えるような法を説かれ、それを聞いて

て、ある者達は預流果を作証し — 前に同じ⁴⁶⁾ — ある者達は〔三〕帰と〔五〕学処とを授かったが、世尊が長時間に亘って⁴⁷⁾法を説いたので、食事の時間が過ぎてしまった。

長者メーダカが「世尊よ、食事の準備をなさって下さい」と言うと、世尊は「長者よ、食事の時間はもう過ぎてしまった」と答えたので、彼が「世尊よ、非時〔食〕には何が適切でしょうか」と尋ねると、世尊は「牛酪、糖丸、糖蜜、それに飲物⁴⁸⁾である」⁴⁹⁾と言われた。そこで長者メーダカは職人達を呼んで言った。

「お前達、直ちに非時食を用意せよ」と。彼らは非時食⁵⁰⁾を用意した。こうして長者メーダカは仏を上首とする比丘僧伽を、非時の硬食や非時の軟食によって満足させた。こうして世尊は長者メーダカを従者共々〔四聖〕諦に安住せしめ、〔その〕町に住んでいる人々を見事に教化してから立ち去られた⁵¹⁾。

後半：メーダカ長者の過去物語

[131] 疑いを生じた比丘達は一切の疑いを断じて下さる仏・世尊に尋ねた。

「大徳よ、〔長者〕メーダカ、メーダカの妻、メーダカの息子、メーダカの〔息子の〕嫁、メーダカの男奴隷、メーダカの女奴隷は、いかなる業をなしたかのために六人とも幸運な人として有名になり、〔また〕世尊のもとで〔四聖〕諦を見、そして彼らは世尊を喜ばせ、不快にさせることがなかったのですか」と。

世尊は言った。

「比丘達よ、彼らによって為され積み上げられた業は、資糧を獲得し縁が熟すと、暴流の如く押し寄せてきて避けることはできない。彼らが為した業を、他の誰が享受しようか。比丘達よ、為され積み上げられた業は、外なる地界・水界・火界・風界で熟すのではない。そうではなく、なされた業

は、善であれ悪であれ、感覚のある〔五〕蘊・〔十二〕処・〔十八〕界においてのみ熟すのだ。

業は何十億劫を経ても滅することはない。〔因と縁の〕和合と時機とを得て、有情達に〔その〕果報をもたらす⁵²⁾」

比丘達よ、かつて過去世において、ヴァーラーナシーの都城では、ブラフマダッタと呼ばれる王が王国を統治していた。〔そこ〕は栄えて繁盛し、平和で食物に恵まれ、多くの人で賑わい、闘争・喧嘩・暴動・騒動はなく、強盗や病もなく、米・砂糖黍・牛・水牛に恵まれていた。〔王〕は、荒地がなく、敵のいない王国を一人息子の如くに守護していた⁵³⁾。

ちょうどその時、占い師達はヴァーラーナシーに十二年間の旱魃を予言した。— 飢饉には、チャンチュ（箱）、[132] シュヴェータ＝アスティ（白骨）、そしてシャラーカー＝ヴリッティ（棒による生計）という三種類がある。このうちチャンチュとは、「小箱」の意味で言われている。人々はその中に種を入れ、未来の有情のことを顧慮して残しておく。＜我々が死んでも、人々はこの種によってなすべきことをなすであろう⁵⁴⁾＞と〔考えて〕。小箱に関係があるので、これはチャンチュと言われる。シュヴェータ＝アスティ飢饉とは何か。その時には人々が骨を集めてその骨が白くなるまで煮、その後、煮汁を飲む。白骨に関係があるので⁵⁵⁾、これはシュヴェータ＝アスティ飢饉⁵⁶⁾と言われる。シャラーカー＝ヴリッティとは。その時には人々が脱穀場の窪みから⁵⁷⁾穀物の粒を棒でほじくり出し、多くの水が入っている鍋で煮た後、〔それを〕飲むのである。棒に関係があるので、これはシャラーカー＝ヴリッティと言われる。—

そこでブラフマダッタ王はヴァーラーナシーに鈴を鳴らして布告した。

「汝らヴァーラーナシーの市民達よ、聞くがよい。占い師達は十二年間の早魃があると予言した。シャラカー=ヴリッティ、チャンチュ、シュヴェータ=アスティという飢饉である。汝らの中で十二年分の食糧がある者は〔ここに〕留まれ。ない者は意に任せて行くがよい。飢饉の恐怖がなくなった者は豊作の時にまた戻ってこい」

さてその時ヴァーラーナシーには、裕福で、広大な財産と巨額の資産を持ち、沢山の従者を従えた⁵⁸⁾、ある長者が住んでいた。彼は倉庫の管理人を呼び、「おい、お前⁵⁹⁾、私と従者の十二年間分の食糧はあるか」と言うと、彼は「ご主人様、ございます」と答えた。そこで彼はその同じ場所に留まることにしたが、直後にその飢饉がやってきた。彼の蔵や倉庫は底を尽くわ、従者達は総て死ぬわで、自分自身も第六番目に〔食事をする〕人間として残っていた。その長者は蔵と倉庫を綺麗に掃除して一プラスタ分の穀物を掻き集ると、彼の妻が鍋に入れて料理した。

— 諸仏・諸世尊が出現しない時は、独覚達が世に出現することになっている。〔独覚〕達は、哀れで惨めな者達を憐れみ、人里離れて生活し、世間の中で唯だ一人、施しを受けるに相応しい者なのである⁶⁰⁾。

しばらすると、ある独覚が地方を遊行しながら、ヴァーラーナシーに到着した。彼は午前中に衣を身につけて衣鉢を持つと、托鉢のためにヴァーラーナシーに入っていた。その時、かの長者は、自分自身、第六番目に食事をする〔人間〕として残っていた⁶¹⁾。さてその独覚は托鉢しながら、次第してその長者の住居に⁶²⁾やって来た。その長者は、心を浄らかにし、身を浄らかにしてくれるそ〔の独覚〕を見た。そして見終わると、<私はこれさえも喜捨し、命をも必ず断じよう⁶³⁾。いざ私は自分の分をあ

の出家者に布施しよう>と〔彼〕は考えた。

[133] 彼が妻に「妻よ、私は自分の分を

あの出家者に布施するぞ」と言うと、彼女は考えた。

<自分の夫が食事を取らないのに、どうして私が食事を取れましょう>と。

彼女は言った。

「あなた、私も自分の分をあの方に布施することにしますわ」

同様に、息子、息子の嫁、男奴隷、そして女奴隷も、思案した挙げ句に各自の分け前を喜捨した。こうして彼らは全員揃って独覚に施食を布施したのである。

その立派な人達に対する説法は、言葉ではなく身体でなされた。彼は翼を広げた白鳥の王のように空高く舞い上がり、光り、熱し、雨を降らせ、稲妻を放つ神変を現し始めた。

— 神通力とは凡夫達を速やかに回心させてしまうものである。 —

彼らは木々が根元から切り倒されたように〔彼の〕両足に跪き、⁶⁴⁾誓願し始めた。長者が誓願し始めた。

「私はあなたのような真の応供者を供養しました。この善根によって、もしも私が空の蔵や倉庫を見れば⁶⁵⁾、見た途端に〔その中〕が満たされますように。そして〔私〕はこのような徳を得た者となりますように。また〔あなた〕よりも優れた師を喜ばせ、不快にすることがありませんように」と。妻が誓願し始めた。

「私はあなたのような真の応供者を供養しました。この善根によって、もしも私が一人のために鍋を煮れば、百人でも千人でもそれを享受し、私が〔煮る〕のを止めない限り、尽きることがありませんように。そして〔私〕はそのような徳を得た者となりますように。また〔あなた〕よりも優れた師を喜ばせ、不快にすることがありませんように」と。

息子が誓願し始めた。

「私はあなたのような真の応供者を供養しました。この善根によって、私は五百の財布が〔私の〕腰に付いて離れませんように。

そしてもしもそこから百あるいは千〔金〕を使えば、直ちに〔その中〕が満たされ、尽きることがありませんように。そして〔私〕はそのような徳を得た者となりますように。また〔あなた〕よりも優れた師を喜ばせ、不快にすることがありませんように」と。

嫁が誓願し始めた。

[134]「私はあなたのような真の応供者を供養しました。この善根によって、もしも私が一つの香を用意すれば、百あるいは千の香を香らせることができ、私が〔用意する〕のを止めない限り、尽きることがありませんように。〔私〕はそのような徳を得た者となりますように。また〔あなた〕よりも優れた師を喜ばせ、不快にすることがありませんように」と。

男奴隷が誓願し始めた。

「私はあなたのような真の応供者を供養しました。この善根によって、もしも私が一つの鋤を引けば、七つの〔鋤の〕刃が引かれていますように。そして〔私〕はそのような徳を得た者となりますように。また〔あなた〕よりも優れた師を喜ばせ、不快にすることがありませんように」と。

女奴隷が誓願し始めた。

「私はあなたのような真の応供者を供養しました。この善根によって、もしも私が〔何かを〕一つ分手にすれば⁶⁶⁾、〔それが〕七倍になりますように。そして〔私〕はそのような徳を得た者となりますように。また〔あなた〕よりも優れた師を喜ばせ、不快にすることがありませんように」と。このような誓願が彼らによってなされたのであった。するとその立派な独覚は彼らを憐れみ、神通力によって上空に〔舞い上がり〕、王の屋敷の上空に向かった⁶⁷⁾。ちょうどその時、ブラフマダッタ王は楼閣の平屋根の上に行って留まっていた。神通力によって進んでいた〔独覚〕は、ブラフマダッタ王の上に影を落とした。彼は上を向いて眺め始めると、かの独覚が見えた。彼は

次のように考えた。

＜あの立派な方は神通力という偉大な鋤で誰の貧困の根を引き抜かれたのだろうか＞

—〔人の〕願いというものは恐ろしいものだ⁶⁸⁾。—

その後、その長者が蔵や倉庫を観察し始めると、やがて〔中が〕満たされているのが分かった。彼は妻に「まず私の誓願が成就したぞ。次はお前達のも確かめてみよう」と告げた。そこで女奴隷が穀物を一握り用意し始めると、〔それは〕七倍になった。妻が一人分の鍋を煮ると、ちょうど彼ら全員で食べられるようになっていた。また、何百千⁶⁹⁾という近所の人達が、ちょうど食べられるようになっていた。まったく同様に、息子、嫁、奴隷の誓願も成就していたのである⁷⁰⁾。

そこで長者はヴァーラーナシーに鈴を鳴らし、[135]「皆さん、食物の欲しい人はいらっしゃい」と告げた。ヴァーラーナシーは、てんやわんやの大騒ぎであった。王はそれを聞いて「お前達、この大騒ぎは一体何事だ」と言うと、大臣達は「王よ、各々という長者が蔵や倉庫を開いたのです」と答えた。⁷¹⁾王は彼を呼んで言った。

「世間の者達がすべて死んでいく時に、お前は蔵や倉庫を開いたのか」と。

「王よ、誰の蔵や倉庫が開かれたというのです。そうではなく、私は今日種を蒔き、その日のうちに実を結んだのです」と。

王が「どんな風にだ」と尋ねると、長者は一部始終を詳しく告げた。王は言った。

「長者よ、お前はあの立派な方に食物を布施したのか」

「王よ、この私が布施したのです」

〔王〕は浄信を起こして詩頌を唱えた。

「ああ、徳より成り、一切の過失を離れた大地に蒔かれた種が、今日その日のうちに結実せり」

「比丘達よ、どう思うか。その長者、長者

の妻、長者の息子、長者の〔息子の〕嫁、長者の奴隷、長者の女奴隷こそ、長者メーダカ、メーダカの妻、メーダカの息子、メーダカの〔息子の〕嫁、メーダカの奴隷、そしてメーダカの女奴隷であったのだ。彼らは独覚を供養して誓願を立てたが、その業の異熟によって〔彼ら〕は六人の幸運な人として生まれ、私のもとで真理を知見した。彼らは百千コーティの独覚よりも優れた大師である私を喜ばせ、不快にさせることがなかったのである。こういうわけで比丘達よ、完全に黒い業には完全に黒い異熟あり、完全に白い業には完全に白い〔異熟〕があり、〔黒白〕斑の〔業〕には〔黒白〕斑の〔異熟〕がある。それゆえ、この場合、このように学び知るべきである。すなわち、完全に黒い業と〔黒白〕斑の〔業〕とを捨て去って、完全に白い業においてのみ心を向けるべきである。このように比丘達よ、お前達は学び知るべきである⁷²⁾」

世尊がこう言われると、歓喜したかの比丘達は世尊の言われたことに満足した。

以上、吉祥なるディヴィヤ・アヴァダーナにおける「メーダカ・アヴァダーナ」第十章。

<略号>

BHSD: *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, F. Edgerton, New Haven, 1953.

D.: Derge (Taipei Edition).

Divy: *Divyāvādāna: A Collection of Early Buddhist legends*, ed. E. B. Cowell and R. A. Neil, Cambridge, 1886 (Reprint: Amsterdam, 1970).

Dhp-a: *Dhammapadattḥakathā*, 4 vols., PTS.

GBM: *Gilgit Buddhist Manuscripts: Facsimile Edition* (Śata-Piṭaka Series 10), ed. R. Vira and L. Chandra, part 1-10, New Delhi, 1959-1974.

MSV i-iv: *Mūlasarvāstivādinaya*, ed. N. Dutt, 4 vols., Srinagar and Calcutta, 1942-1950.

Mvy.: *Mahāvvyutpatti*.

P.: Peking.

PTS: Pali Text Society.

Skt.: Sanskrit.

T.: *Taishō Shinshū Daizōkyō*, ed. J. Takakusu and K. Watanabe et al., 55 vols., Tokyo, 1924-1929.

Tib.: Tibetan.

TSD: *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, Lokesh Chandra, New Delhi, 1959.

Vin.: *Vinayapīṭaka*, 5 vols., PTS.

<引用文献>

Burnouf (1844) = Eugène Burnouf, *Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien*, Paris.

Ch'en (1953) = Kenneth Ch'en, "Apropos the Mendhaka Story," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 16, pp. 374-403.

佐々木 (1999) = 佐々木閑『出家とはなにか』東京: 大蔵出版.

平岡 (2002) = 平岡聡『説話の考古学: インド仏教に秘められた思想』東京: 大蔵出版.

<注>

1) 同じ様に、内容的には一纏まりと見なしうるが、独立した章立てになっている説話は、Divy.第23-25章である。Cf.平岡 (2002: 59-61).

2) Divy.第7章も同じ主題を扱っていると言える。Cf.平岡 (2002: 48-49).

3) ただし、ダットの刊本の最初の3頁分はDivy.から補われているので、実際の写本はダットの刊本の244頁の5行目(-sāmantakam)からしか存在しない。なお、MSVの出典に関しては、巻数を省略する。

4) Tib.の引用に関しては、北京版もデルゲ版も葉数と行数のみを記し、その他は省略する。また出典の順番は(北京版;デルゲ版)とする。

5) Skt. bhadrāṅkara; Tib. bzang byed.

6) Tib.は「優れた福德で有名な六人が住んでいて (bsod nams chen por shes par bya ba drug gnas te)」(26a3; 28a5) とする。

7) Skt. menḍhaka; Tib. lug.

8) nakulaka (124.2). BHSD (s.v. nakulaka) はこれを money bagあるいは purse と解釈する。通常、これに対応する Tib.は、Mvy. (6024)によると、rgyan neu' le canであり、直訳すれば

- 「ナクラの形をした飾り」を意味するが、文脈からして、「財布」、つまり「ナクラの革から作った財布」とするのが妥当である。しかし、ここではnakulakaに対応するTib.がrgyan ne 'u le canではなく、「容器 (snod)」(26a5; 28a7)となっている。
- 9) Tib.は「優れた福德で有名だったかということ (bsod nams che par shes she na)」(26a7; 28b2)とする。
- 10) Tib.はここを「彼女が穀物用の播り粉木の長さ〔の残量〕すれすれ一杯を計量すると、それは七倍に増えるのであって (de gang gi tshe 'bras gtun gang tsam drus pa de'i tshe bdun tsam du skyas par 'gyur te)」(26a7-8; 28b2-3)とし、女奴隷の特性に関してSkt.とTib.との間に相違が見られる。
- 11) 定型句 8-A (ブツダの救済), 平岡 (2002: 172).
- 12) Tib.は定型句 8-Aを省略し、女奴隷の福德の描写に続いて、直ちに「そこで世尊は長者メーンダカを教化すべき時がきたと了知されて、同志アーナダに告げた (de nas bcom ldan 'das kyiis khyim bdag lug gi gdul ba'i dus mkhyen nas/ tshe dang ldan pa kun dga' bo la bka' stsal pa)」(26a8; 28b3)とする。
- 13) *prṣṭhataḥ prṣṭhataḥ samanubaddhā gacchanti* (125.22-23). Tib.はこれに相当する訳語を欠く。
- 14) 定型句 8-C (仏弟子に圍繞されて遊行するブツダ), 平岡 (2002: 174). なお、Tib.は「すると、〔自己を〕調御し、寂靜で、阿羅漢である世尊は、〔自己を〕調御し、寂靜で、阿羅漢である〔弟子達〕を従者として (de nas bcom ldan 'das dul ba/ 'khor dul ba/ zhi ba/ 'khor zhi ba/ dgra bcom pa/ 'khor dgra bcom pa dang)」(26b4; 28b6-7)とし、この定型句の前半の僅かな部分だけが訳されているに過ぎない。Tib.ではこの定型句が省略されたか、あるいはこの定型句のアーキタイプが原文に残され、それをTib.が原文に忠実に訳していた可能性がある。
- 15) *yadā bhagavatā śrāvastyāṃ mahāprātihāryaṃ vidarśitaṃ nirbhartsitā ānanditā devamanuṣyās toṣitāni sanjjanahṛdayāni* (126. 15-17). 下線部分に対応するTib.はない。
- 16) *bhagnaprabhāvas* (126.17-18). これに相当するTib.もない。
- 17) *parasparaṃ kathayanti* (126.20). Tib.はこれを「考えた (snyam mo)」(26b6; 29a2)とする。
- 18) *kulopakaraṇaśālā* (126.23). 校訂者はこれを索引でtownhouseあるいはlawcourtと解釈する。Tib.はこれを「良家の家々 (rigs kyi khyim dag)」(26b6; 29a2)とするが、正確な意味は不明。ここでは校訂者の解釈に従って和訳する。
- 19) *dharmalābha* (126.17-18). 校訂者はこれを索引でjusticeと解釈する。Tib.はこれを「法を得よ。法を得よ (chos thob par gyur cig/ chos thob par gyur cig)」(26b7; 29a2)とするが、これも意味不明。とりあえず、ここでは校訂者の解釈に従い、主格を呼格に改めて和訳しておく。
- 20) Tib.はāryāḥに相当する「聖者方よ ('phags pa dag)」(26b7; 29a2)をここに置く。
- 21) Tib.はbhavantaに相当する「皆さん (she ldan dag)」(26b7; 29a2)をここに置く。
- 22) *bhadraṃkaraṃ nagaraṃ pravāsayata* (127.4-5). Tib.はここを「(パドランカラ周辺の住民すべてを〔この都城から〕追い出し)パドランカラの都城に入れよ (grong khyer bzad byed kyi nang du chud cig)」(27a2; 29a5)とする。文脈からすれば、Skt.の「空にせよ」の方がよからう。
- 23) *te 'vasthitāḥ* (127.7). Tib.はこれに相当する訳語がない。
- 24) Tib.にはSkt.の *na mama pratirūpaṃ yad ahaṃ bhag a vato 'satkāraṃ adhyupekṣeyaṃ..... sa nāma bhagavān sarvalokapratiṣiṣṭaḥ sarvavādavijayī* (127.11-15)に相当する訳語が見られない。
- 25) *vātavalāhakānāṃ devaputrānāṃ* (127.17). Tib.は「風を放つ天子 (rlung gtong pa'i lha'i bu)」(27a7; 29b2)とし、Skt.のように「風雲」としない。
- 26) *bhadraṃkaranagarasāmantakena* (127. 18). Tib.にはこれに相当する訳語がない。
- 27) *varṣavalāhakānāṃ devaputrānāṃ* (127. 19). Tib.は「雨を降らす天子 (char 'bebs pa 'i lha 'i bu)」(27a7; 29b2)とし、Skt.のように「雨雲」としない。
- 28) Tib.は「彼らが〔毒水を〕干上がらせたので、お前達は八功德水で満たせ ('di rnams kyiis bskams pa dang khyod kyiis chu yan lag brgyad dang ldan pas khod shig)」(27a7; 29b2-3)とし、下線部分がSkt.にはない。
- 29) Tib.は「雨を降らす天子はそこを再び八功德水で満たした (char 'bebs pa'i lha'i bus ni der

- yang chu yan lag brgyad dang ldan pas bkang ngo)」(27a7; 29b2-3) とし、Skt.の記述の方が詳細になっている。
- 30) kim asau yuṣmākaṃ bhikṣāṃ carīṣyati (128.5-6). MSVは「どうして彼があなた方の乞食を禁止しましょうか (kim asau yuṣmākaṃ bhikṣāṃ vārayisyati)」(244.15-16) とし、下線部分がDivy.と異なる。Tib.は「どうして彼があなた方の乞食を禁止すると思うのですか (ci des khyed cag gi slong ba bkag par 'gyur snyam mam)」(27b4-5; 30a1) とるので、MSVに一致する。
- 31) MSVにはここにanupūrveṇa (245.1) があり、Tib.も「次第して (rim gyis)」(27b6; 30a2) とする。
- 32) nagare (128.11). MSVにはこの語がなく、Tib.にもこれに相当する訳語がない。
- 33) śākyakulanandanaḥ (128.14). この場合のnandanaは「息子」の意味であるが、Tib.はこれを文字通り「シャーキャ族の家系を喜ばせ (shā kya'i rigs dga' bar mdzad pa)」(27b7; 30a3) と訳す。
- 34) sa idānimandhakāre tiṣṭhati (128.15). MSVにはこの語がなく、Tib.にもこれに相当する訳語がない。
- 35) 定型句9-C (預流果), 平岡 (2002: 183).
- 36) 定型句9-D (預流者の歓声), 平岡 (2002: 184).
- 37) ehi (128.23). MSV (245.13) も同じ読みを示すが、Tib.は「こちらへ (tshur)」(28a3; 30a7) とし、Skt.のihaと混同しているように思われる。
- 38) MSVではこの部分が欠損して読みを確認できないが、Tib.には「世尊は〔彼女が〕誰にも見つからないように加持したので (bcom ldan 'das kyis ji ltar sus kyang mi tshor ba de ltar byin gyis brlabs nas)」(28a6; 30b2) とし、Divy.の伝承と異なる。
- 39) MSVではここに「娘よ (dārike)」(246.1) が見られる。Tib.も「娘よ (bu mo)」(28a7; 30b3) とし、MSVに一致する。
- 40) 定型句9-C (預流果), 平岡 (2002: 183).
- 41) bhadrāṃkaranaganivāsī (129.23). MSVもTib.にもnagaraに相当する訳語がない。
- 42) nirbandhaṃ (128.29). この語は「〔何かに〕固執すること」を意味し、文脈に合わない。MSVはこれを「冷静な (nirdvandvaṃ)」(247.2) とする。Tib.もこれに呼応し、rtsad med pa (28b7; 31a3) とする。Mvy. (58) ではこれが仏の異名としてリストされているので、ここはnirdvandvaṃに読み替える。
- 43) karuṇāvadātam (128.30). Divy.では「〔大〕悲によって浄められた」という意味になるが、MSVはこれを「黄金のように目映い (kanakāvadātam)」(247.2) とする。Tib.も gser gyi mdog can (28b7; 31a4) とし、MSVに一致するので、ここもMSVの読みを採用する。
- 44) te gatvā bhagavataḥ pādābhivadanam kṛtvā purato niṣaṇṇāḥ/ yāvad bhagavataḥ sāmantakena parṣat sannipatitā (130.10-12). MSVはこれを「すると、大勢の人々が集まってきたので、世尊の周辺には一ヨーjanyaの衆会が形成された (tato mahājanakāyasan-nipātād bhagavato yojanaṃ sāmantakena parṣat sannipatitā) (247.12-13) とし、Divy.の伝承とかなり異なる。Tib.は「すると、大勢の人々が集まってきたので、世尊の周辺一ヨーjanyaまでを取り囲んで坐った (de nas skye bo'i tshogs chen po 'dus pas bcom ldan 'das kyis nye 'khor dpag tshad gcig tshun chad 'khor bar 'dug go)」(29a2-3; 31a6-7) とし、ほぼMSVに一致する。
- 45) tāṃ parṣadam abhyavagāhya (130.12-13). BHSD (s.v. abhyavagāhya) はDivy.のこの箇所を引用し、having ripened/ matured あるいは having occupied himself with と解釈する。MSVは avagāhya (247.14) とし、Divy.とほぼ同じ読みを呈するが、文字通り解釈すれば、「その集会の中に入り」と訳せる。しかし、ブツはすでに衆会に取り囲まれているわけだから、さらにその中に「入る」のは文脈に合わない。そこでTib.を参照すると、「その衆会を威厳で圧倒して ('khor de rnam zil gyis mnan te)」(29a3; 31b7) とある。TSDによると、下線に対応するSkt.は abhibhūya が考えられるが、語形的に abhyavagāhya に近いとは言えない。ここでは文脈を重視し、Tib.の読みに従う。
- 46) 定型句9-E (聞法の果報), 平岡 (2002: 186). これは定型句であり、中間が省略されているのかかわらず、Divy.では pūrvavad yāvāt 等の語が見られない。MSVには pūrvavad (247.16) が見られるし、Tib.も zhes bya ba nas gong ma bzhin du 'o (29a4-5; 31b1) とするので、MSVよりpūrvavadを補って訳す。
- 47) aciraṃ (130.16). この読みに従えば、「短時間で」となり、文脈にそぐわない。MSVはこ

- れを「非常に長い間 (aticiraṃ)」(247.17) とするし、Tib.も「長時間に亘って (yun ring po zhig tu)」(29a5; 31b1-2) とするので、この読みに従う。
- 48) ghrtaguḍaśarkarāpānakāni (130.20). MSVは基本的にこれと同内容であるが、Tib.は「牛酪と糖丸と精糖と糖蜜と飲物 (mar dang bu ram dang hvags dang sha kha ra dang btung ba dag dang)」(29a7; 31b3) と五項目の食品名を出し、Skt.よりも一つ多い。これをSkt.と対応させると、hvagsがTib.にのみ存在する。
- 49) これは食に関する律規定である非時食戒を前提にしている。正午を過ぎれば翌日の日の出まで食事をしてはならないという非時食戒の規定があるが、正午を過ぎても果実のジュースなどは飲むことが許されていた。佐々木 (1999: 139) は、律文献を手がかりに、古代インド仏教の出家者がどのような生活を送っていたかを平易な文章で解説しているが、それによれば、ジュースの他にも五種類の食品 (純正バター・フレッシュバター・油・蜜・糖) に限っては飲食することが許されていたらしい。これらは本来、薬として摂取が認められていたものだが、やがておやつのように用いられることになり、正午を過ぎてから僧団に到着した比丘をもてなす時など、これらの食品が出されるようになったと指摘する。
- 50) akālakāni (130.22). MSVはここを「非時食 (akālakāhādyakāni)」(248.3) とするし、Tib.にも「非時の流動食 (dus ma yin pa'i bca' ba rnam)」(29a8; 31b4) とあるので、この読みに従う。
- 51) このあとDivy.では「以上、吉祥なるディヴィヤ・アヴァダーナにおける「長者メーダカの繁栄」第九章 (iti śrīdivyāvādāne meṇḍhakagr̥hapativibhūtiparicchedo navamaḥ) う一節があるが、ここでは第九章と第十章とを一纏まりの説話として扱うので、ここではこの章名を省略する。なお、Divy.の第九章と第十章の源泉となる根本有部律薬事には、この二つの章の間に金銀の授受に関する説話が見られるが、Divy.ではこの部分が省略されている。
- 52) 定型句 6-A (業報の原理), 平岡 (2002: 167). なおMSVではこの定型句が pūrvavad yāvad (250.4) で省略され、Tib. (30a7-8; 32 b4-5) もMSVと同じ体裁を取る。
- 53) 定型句 2-B (王国の繁栄), 平岡 (2002: 190). MSVはこの定型句を pūrvavad yāvad (250.6) で省略するが、Tib.ではこの定型句そのものが存在せず、したがってMSVのように省略されることもない。
- 54) mṛtānāṃ anena te vījakāyaṃ kariṣyantīti (131. 224-25). MSVはこれを「人々はこの種によって我々のなすべきことをなすであろう (asmākaṃ anena bijena manuṣyāḥ kāryaṃ kariṣyantīti)」(250. 11-12) とする。Tib.はまた少し違う読みを示し、「我々の死後、この種が人々のなすべきことをなすであろう (bdag cag shi nas 'bru 'dis mi de dag gi bya ba byed par 'gyur ro)」(30b2; 32b7) とする。これらの読みを勘案し、文脈を重視して、ここでは asmākaṃ mṛtānāṃ anena bijena manuṣyāḥ kāryaṃ kariṣyantīti というSkt.を暫定的に想定して和訳しておく。
- 55) Divy.にはこれに相当する一節がないが、MSVには「これは白骨に関係があるので (idaṃ śvetāsthisaṃbandhāt)」(250.15) とあり、Tib.も「これは白色骨と関係するので白色骨 [飢饉] と言われる ('di ni rus gong dkar po dang 'brel bas rus gong dkar po zhes bya 'o)」(30b3; 33a1) とする。他の二つの飢饉も同様の表現を取るの、ここはMSVの一節を補う。
- 56) durbhikṣam (132.3). Divy.ではこの飢饉だけにこの語を付す。MSVとTib.とは三つの飢饉すべてにこの語を付さない。
- 57) khalu vilebhyo (132.4). MSVはこれを「脱穀場の窪みから (khālābilebhyo)」(250.17)、Tib.も「脱穀場の裂け目から (g-yul gyi ser ga nas)」(30b4; 33a1) とするので、この読みに従う。
- 58) vistīrṇaparivārah (132.13). MSVには「沢山で多くの従者を従えた (vistīrṇavi śālaparivārah)」(251.5) とあり、Tib.も「沢山で多くの従者を従えた ('khor yangs shing rgya che ba)」(30b4; 33a1) とする。
- 59) puruṣa (132.14). これに相当するTib.は「家長よ (nang rje)」(30b7; 33a4) であり、上下関係が混乱しているように思われる。
- 60) 定型句 5-B (独覚), 平岡 (2002: 167). MSVはこの定型句を省略しないが、Tib.は zhes bya ba nas zhes bya ba'i bar gong ma bzhin du'o (31a1; 33a6) で省略する。
- 61) sa ca gr̥hapatir ātmanā saṣṭho 'vasthito bhoktum (132.24-25). MSVはこれを「その時、かの長者は食事の用意をしていた (sa ca gr̥hapatīḥ saṣṭho 'vasthito bhoktum)」(251.16)

- とし、Tib.も「その長者も食事の用意をしていて (khyim bdag des kyang bza' ba bsdogs pa dang)」(31a2; 33a7) とする。
- 62) tasya gr̥hapater niveśanam (132.26). MSVはこれを「彼の家に (tasya gr̥ham)」(251.17) とし、Tib.も「彼の家に (de'i khyim du)」(31a3; 33b1) とする。
- 63) etad apy ahaṃ parityajya niyataṃ prānair viyokṣye (132.28-29). MSVはこれを「私はこれを食べたとしても、きっと死ぬに違いない (etad apy ahaṃ paribhujya niyataṃ prānair viyokṣye)」(251.19) とし、Tib.も「私がこれを食べても必ず死んでしまうに違いないから ('di bdag gis zos kyang gdon mi za bar srog dang 'bral bar 'gyur gyis)」(31a3; 33b1) とし、MSVに一致する。こちらの読みの方がいいかもしれない。
- 64) MSVはここに「意に任せて (yatheṣṭam)」(252.7) を置く。Tib.も「すべての望みを叶えて (ci 'dod pa gdab par)」(31a7; 33b5) とする。
- 65) Divy.にはここに paśyāmi がないが、MSV (252.10) にはあるし、Tib.にもこれに相当する bltas (31a8; 33b5) がある。同様の記述は Divy. (123.21) にもあり、ここでも paśyati が使われているので、この語を補う。
- 66) yady ekāṃ mātrām ārabheyam (134.11). MSVは「穀物を一マトラ分手にすれば (dhānyānām ekāṃ mātrām ārabheyam)」(253.12-13) とし、Tib.は「もしも私が食器すれすれ一杯を計量すれば (bdag cag gis gal te snod gang tsam drus pa)」(32a1; 33b6) とする。
- 67) riddhyā upari vihāyasā rājakulasyopriṣṭ hāt samprasthitah (134.15-16). MSVは単に「神通力で出発した (riddhyā samprasthita ḥ)」(253.16) とし、Tib.も神通力で出発した (rdzu 'phrul gyis chas pa dang)」(32a2; 34a7)
- 68) balabali āśā (134.20-21). MSVはこれを balavaty āśā (253.20) とするが、語形的にはこの方が相応しいので、この読みに訂正する。なお、この一節は本文中の訳のようにサブタイトルとして理解する方が適切と思われるが、Tib.はこれを「そこでかの長者が大きな願いを以て蔵と倉庫とを見ると (de nas khyim bdag de re ba chen pos mdzod dang bang mdzod rnams la bltas pa dang)」(32a4; 34b1-2) とし、次の文章に関連づけて訳している。
- 69) śatasahasraih (134.26). MSV (254.5-6) も同じ表現を取るが、Tib. は「千 (stong)」(32a6; 34b3) とし、「百」には言及しない。
- 70) tathaiva putrasya snuṣāyā dāsasya praṇ-dhiḥ siddhā (134.27-28). これはMSVにもTib.にも存在しない。
- 71) MSVにはここに「王は言った。「世間の者達がすべて死んでいく時に、その長者は蔵や倉庫を開いたのか。お前達はその長者を呼んでこい」と (rājā kathayati yāvat sarva eva lokāḥ kālagatas tadā tena gr̥hapatīnā koṣakoṣṭhā-gārāṇy udghātītāni/ āhūyatām bhavantaḥ sa gr̥hapatir iti)」(254. 11-13) という文章が見られる。Tib.にもこれに対応する文rgyal po smras pa/ gang gi tshe 'jig rten thams cad shi zin pa de'i tshe khyim bdag des mdzod dang bang ba rnams phye 'am/ shes ldan dag khyim bdag de khug shig (32a8; 34b4-5) が存在する。
- 72) 定型句6-B (黒白業), 平岡 (2002: 168).

※ なお本稿を纏めるに当たっては、佛教大学教授の小野田俊藏先生より、チベット語の読みに関して有益な示唆を多々頂戴した。この紙面を借りて謝意を表する。有り難うございました。

ABSTRACT**A Story of the Family of Six with Supernatural Powers**— An Annotated Japanese Translation of the *Meṇḍhakāvadāna* —

Satoshi HIRAOKA

This is an annotated Japanese translation of the *Meṇḍhakāvadāna*, the 9th and 10th chapters of the *Divyāvadāna* (*Divy.*), a collection of narrative literature. It is normal in the *Divy.* that a present story of a leading character goes with a story of a former life of the character in the same chapter. In this narrative, however, the 9th chapter deals with the present story of Meṇḍhaka, the leading character, while the 10th contains a story of his own former life. While I cannot at present explain why they came at some point to be treated as two independent stories, in any case here I would like to treat these two chapters as a unit.

The first half explains that Meṇḍhaka and each member of his family have supernatural powers, and the second half illustrates why they came to have such powers by means of a story of their former lives, based upon the principle of karma and its fruition.

The narrative literature knows a number of stories, the main subject of which is donation by lay disciples. In the case of the *Meṇḍhakāvadāna*, the emphasis seems to be put on the attitude with which one gives, rather than what one gives. This narrative explains that a householder and his family, afflicted by a long famine, give their last meals to a Pratyekabuddha, as a result of which they received their supernatural powers.